

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

福井克也

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態とそれを対象とする漁業の実態を明らかにし、両種の資源の維持・増大を図るための基礎資料とする。

2. 研究方法

(1) ワカサギ・シラウオ産卵状況調査

ワカサギについては、斐伊川河口から約2km上流の灘橋までの間に30定点を設け、エクスマンバージ採泥器(0.02m²)による採泥を実施してワカサギ卵を採集した。調査は平成26年2月14日と3月14日～19日までの2回実施した。

シラウオについては、宍道湖沿岸域に定点を設け、シラウオの産卵期である平成25年4月～6月までと、平成26年1月～3月まで、月1回実施した。調査定点数は4月～6月までが9点、1月～3月までは15点とした。シラウオ卵の採集は、スミスマッキンタイヤ採泥器(0.05m²)により実施した。ワカサギ・シラウオ共に、採集した試料は10%ホルマリンによる固定とローズベンガルによる染色を行ったのち計数した。

(2) 稚魚分布調査

平成25年6月28日～7月19日にかけて、宍道湖から中海までの21箇所、調査船わかさぎ丸を用い、桁引網(目合2mm、全長26m、桁長4.5m)により各箇所30m曳網した。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況

ワカサギについては、1回目の調査は増水の影響により27地点で、2回の調査では30地点で採泥を行ったが、いずれもワカサギの卵は確認できなかった。

シラウオについては、平成25年4月～6月までの調査では、6月上旬まで産卵が確認され、産卵のピークは4月であった。北岸と南岸で産卵量が多く、1m以浅の調査点より水深2m

の調査点で産卵量が多く、その最大値は4月の南岸水深2mで、1m²あたり11,000粒であった。26年1月～3月までの調査では、1月から産卵が確認されたものの、産卵数が少なく、水深1m未満の沿岸部では1m²あたり20～80粒程度であった。また、水深2m帯の調査定点でも、3月の南岸で確認された380粒が最大値であり、前年同時期の5%程度まで産卵量が減少していた。

(2) 稚魚の分布状況

ワカサギ稚魚については、西部の流入河川内で25尾、中海流入河川内で1尾採捕されただけであった。

シラウオは宍道湖から大橋川までの14地点中10地点で採取されたが、西岸部の流入河川内に分布が偏っていた。また、中海では全く採取されなかった。

(3) 今年度の漁獲

宍道湖漁協集計による平成25年漁期の定置網漁獲記録(ます網、小袋網)によれば、ワカサギの漁獲は25尾であり、依然、資源水準は極めて低位な状況にあると判断された。シラウオについては、24年漁期の漁獲量が3,983kgであったのに対し、25年漁期は315kgと前年漁獲量の8%まで大きく減少した。今漁期は、前年より操業する定置網が減少していたため、CPUE(定置網1統の操業1日あたりの漁獲量)を比較すると、24年漁期が3.7kg/日であったのに対し、25年漁期は0.8kg/日と前年の21%にまで減少していた。以上の結果から、25年漁期のシラウオ資源量は前年と比べ大きく減少していたと推測された。

4. 研究成果

得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会、また宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会で報告した。